

2018年

3月10日  
第312号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

## 古戦場跡 20Kを歩く

園長 児嶋草次郎

春の到来を感じさせる、うららかな2月18日（日）の朝8時30分、友愛園の子供たちと職員たちはみんな、三友館前の広場に集合しました。20Kハイキングです。

今年は新たな初めてのコース。「九州の関ヶ原の戦い」と言われる「根白坂合戦」と「高城川合戦」という、今から430年から440年前の古戦場跡を20K歩きます。「根白坂合戦」は1587年、豊臣秀吉（来たのは弟の羽柴秀長）と島津義久との戦いで、豊臣が勝って九州を平定し、そして全国統一することになった重要な天下分け目の戦いでした。もう一つの「高城川合戦」は豊臣との戦いより9年早く1578年です。豊後（大分）の大友宗麟と薩摩（鹿児島）の島津義久との戦いで、島津が激破し、この日向地方を支配下に置きます。まさに世は戦国時代でした。

何万もの軍勢が互いに死闘を繰り広げた戦いが、この友愛園の目と鼻の先で行われたのです。

なぜ今まで語ろうとも、子供たちに伝えようとしなかったのか。昔から私たち人間は、血で染められた場所を忌み嫌って来ました。おそらく、数千という兵士や馬の死骸がうごめく並んだ場所であり、しばらくは人々は近づくことさえ避けたのではないのでしょうか。普通であれば、その霊を供養したり祀るお寺や神社を建てるところでしょうが、その戦いの後そっくり国替えて、この戦争とは関係のない秋月氏が福岡から来てこの地方を治めることになったので、無視される結果となったのかもしれません。特に根白坂合戦については一。

俄然興味が湧いて来たのは、石井十次がこの歴史的事実を知っていたのかどうかということです。知っていて、その地の上に理想郷を作ろうとしたのだとすれば、これはもう次元を越えた最大の供養となります。「天は父なり 人は同胞なれば互いに相信じ相愛すべきこと」。この言葉が、不戦の誓いにさえ聞こえて来ます。

「知っていたに違いない」。つい最近、そう思えて来て、20Kハイキングでこの戦場跡を歩くことにしたのです。次の世代の子供たちに伝えていく責任も感じるようになったのです。封印して来たのには、私自身の個人的な価値観もあるでしょう。戦前の価値を否定された中で育った団塊の世代は、どうしても戦争否定の感情から、このような伝説を忌避してしまうのです。しかし、石井十次とつなげることで、価値観の転換が私の内部でおきました。

空には雲一つなく、梅の花や日本スイセンの香りがかすかに漂う園庭に、引率職員が付いた子供たちのグループが12組総勢53人で並び、8時46分から、2分間隔ほどで次々にスタート。前日の夜に説明会を開き、「歩きながら当時の戦いを想い、その霊を弔う」を目的に入れています。子供たちの掛け声・歓声に呼応するかのよう、越冬ツバメやスズメが数羽、私たちの頭上で鳴きながら飛び回っていました。

1600年の天下分け目の関ヶ原（岐阜県）の戦いは、だれでも知っています。徳川家康が石田光成等抵抗勢力を破り、天下を取り、江戸幕府を開きました。それから22年前、織田信長が中央地域で実権をほぼ掌握しようとしていた時代です。九州地方はまだ戦国の時代真最中で、それまで日向地方を支配していた伊東氏が島津氏との争いで力を失い、豊後（大分）の大友宗麟のもとへ逃げて助けを求めます。ちなみに、その時一緒に逃げたのが西都市都於郡（とのこおり）にいた伊東マンショです。一昨年、伊東氏の拠点だった都於郡跡まで、友愛園の子供たちは20K歩いています。

大友氏はこれを好機として、3万の勢力で日向に侵入。これに対して島津義久は4万の兵を率いて今の小丸川（高城川）の南岸の根白坂に本陣を構えます。その時の戦いが高城川合戦。根白坂とは、今私たちが椎木坂と呼んでいる坂の上あたりで、中学生たちは毎日学校に通う時ここを通ります。現在この地域を「陣の内」と呼んでいるのは、その名残なのでしょう。

その戦いの9年後1587年には、この根白坂には豊臣軍が陣を構えています。この地域で戦いをするにおいて、この根白坂がいかに重要な拠点となり得るのか、先の高城川合戦を研究し先手必勝でこの地をまず取ったのでしょうか。

織田信長は1582年、本能寺の変で明智光秀に殺され、世は豊臣秀吉の時代へと移っていました。次々と有力勢力を支配下に置き、1585年は四国を平定。次は九州という所に島津に負けた大友が助けを求めて来たのです。

島津義久はこの戦いでは出遅れ、根白坂を取られたので、それより南側の丘の上に2万の兵で陣地を築くしかありません。南側の丘とは、友愛園から東へ向かって500mの交差点から南の宮田川をはさんだ台地の上ということになります。

その台地は石井記念のゆり保育園の南東から茶臼原小学校へと続いているのですが、おそらく、あの十文字を丸で囲んだ薩摩の旗が何十旗と丘の上になびいたことでしょう。

20Kハイキングにもどります。私はいつものように最後尾を歩きます。天心館小学男児グループの後です。スタートは9時5分でした。通用門から下の道路に出て、まばゆい朝の太陽に向かって歩きます。このあたり一帯は、石井十次が理想郷作りで子供たちとともに開拓し、今は、主に独立した方々の末裔によってりっぱに管理され、人と自然との共生の大地として光り輝いています。おそらく二つの合戦の時、陣地を築くには、湧水の確保が重要ですので、この周辺のあちこちに敵味方の陣地が築かれたはずです。

交差点から左に曲り、根白坂へ。この現在の木城・西都線は、中世の頃までは薩摩と豊後を結ぶ重要な言わば国道（官道）でした。信号機の所から南の台地を望むと、ちょうど木が伐採されていて当時の陣地を髣髴（ほうふつ）とさせます。北に向かってゆるい坂を登って行った所が根白坂陣地跡。現在の陣の内地区。豊臣軍と島津軍との戦い（根白坂合戦）の時は、わずか1K弱ほどの間隔でにらみ合ったわけですが、1587年4月17日、1万5千の兵で固める豊臣の陣地に夜襲することから天下分け目の決戦が始まります。

ところが竹柵で堅固に囲った間から鉄砲が雨あられのように打ち出され、島津の兵は次々にたおれていき、夜を徹しての戦いは、死体を踏みつけながらの壮絶なものになったとか。明け方には豊臣氏の他の二つの陣営からも戦闘に加わり、結局、島津軍は惨敗となりました。

この時の豊臣軍は、秀吉の弟羽柴秀長が10万の兵を引きつれ日向に入り、51か所に陣地を張っていたとか。豊臣軍は、鉄砲、兵糧、兵力において圧倒的な軍事力を有していたのです。

気になるのは、先にも書きましたように、この「根白坂合戦」の戦死者たちをどう弔ったかということです。「高城川合戦」では、勝った島津義久が300人の僧を集めさせて供養しています。知っている方がおられたら教えてください。今から30年以上前、この村のある方（故人）が、友愛社の南側の山の頂上に神社を作れと言われたことがあり、忘れられない言葉です。

今の椎木坂（陣の内）の下り始める所に、木城町教育委員会の作った「根白坂古戦場跡について」と見出しのついた案内板が立っています。読むと、薩摩の島津氏について「飛ぶ鳥を落す勢いでの上がって来ました」と表現してあります。大友氏を蹴散らすような勢いで豊臣氏を追い払うことができたら、日本のその後の歴史は変わっていたのかもそれません。ここには「根白坂合戦」では三百人

程の犠牲者を出したと書いてありました。おそらくそんな数ではすまなかったでしょう。

私が中学生の頃は、この台地のまだ北側の突端にあった坂道を通って通学していました。その道が本来の坂で現在の椎木坂は、車社会になって新しくつくられたものです。

9時36分、椎木坂を下り切ると、世界がパッと開けます。正面が尾鈴山系、右の一段高い所は、大友軍が陣地を築いた川南台地。そして小丸川にそって広がる豊かな水田地帯。道路をほぼまっすぐ2Kほど進んだ突きあたりの高台がお城跡。正式には新納院高城（この地域の地名）のお城跡。

のどかな椎木地区の町の中を歩きます。手入れの行き届いた庭のあちこちに梅や紅梅の花が咲き、町の人々は、日曜日の午前中をのんびりと過ごしておられます。中椎木公民館前の標柱には海拔16mと記載してありました。

10時ちょうど、小丸川（高城川）橋。高城川での合戦はこれから少し下流で切原川との合流する手前の川原で行われたようです。今はゆったりと流れていますが、当時は堤防もありませんので、大雨ごとに荒れ狂う無鉄砲な川だったのでしょう。橋を渡って右側が当時の城下町で、左側は武家屋敷地域。二つの戦いの時の城主の山田有信の普段の住いは、この武家屋敷の中に掘をめぐらした所にあったようです。

落葉の残る急な石段を登った所が新納院高城の城跡。二つの戦いの時の城主は、島津の配下山田有信で、1000人から1500人の兵が籠城して城を守りました。台地が西より舌状に突き出した地形を利用しており、東・南・北側は急峻で難攻不落と言われました。

子供たちはトイレに行ったり、展望台に登ったり、お茶を飲んだり、思い思いに休憩。1時間歩いて私も少々疲れを感じ、ベンチに腰を下して広がる街並を見下ろしました。予想通り高くすばらしい眺望です。

山内正徳先生の「高城戦記」には、この城の標高は60メートルで、豊後方面から薩摩方面へ抜ける「交通の喉元であり、高城を制するものは南九州を制するとまで言われていた」と書いてありました。二つの戦いの時も、ここから大友方、豊臣方の動きは手に取るように把握でき、逐一何らかの方法で味方に伝えられたのでしょう。特に、大友軍との戦いの時には、大友方にとってはここを取れなかったことが、敗因になったとも考えられます。

1578年10月20日、大友軍はまず城の回りの民家100戸余りに火を放ち、その騒ぎに乗じて城を攻めたてます。大友軍は総勢3万で、川南台地の要所要所に陣を構えていました。

一方の島津軍は、この城と先ほどの根白坂です。4万を率いて鹿児島から来ています。攻防を繰り返しながら、11月12日、午前8時頃から島津軍の総攻撃開始。高城川（小丸川）を渡り勇猛果敢に大友方に突入。大友軍は次第に劣勢となり、次々に陣地が陥落し、四方八方に敗走。島津軍は耳川（日向市）まで追跡し、7里（28キロ）の間は死骸で埋め尽くされたとか。そして、午後4時頃には島津軍は勝ちどきをあげます。

妄想にふけっているうちに時がたち、私の回りにはだれもいなくなり、あわてて立ちあがり、この戦いの死者を供養する観世音菩薩像（平成5年建立）の前で手を合わせて出発。この案内板には、高城川合戦では「4千人とも7千人とも」いわれる方が亡くなったと書かれてありました。

城を下りて、激戦の行われた川原を次に目差します。現在はりっぱに基盤整備され水田地帯となっていますが、当時はおそらく竜があばれ回った後のように葦（あし）が茂り、大きな石が散乱し、川も瀬があったり淵があって澱んでいたり荒れていたはず。その淵に大友軍の多くの騎馬隊ははまりこみ、「淵は血で紅に彩られ」たと山内先生の本には書いてありました。今、この戦場跡には、「高城川合戦跡」と書かれた大きな標識が立っています。

その手前を左に折れて切原川を渡り、川南台地へと登っていきます。10時38分です。次の目標は宗麟原供養塔です。この高城川合戦では、大友・島津双方で数千人という若い兵士たちが亡くなったわけですが、島津方の大将である島津義久の命により、山田有信がその戦死者を弔うために作った供養塔です。河原の所に立っていた案内には、「これらの供養は敵味方分け隔てなく行われ、島津氏の博愛的な精神が感じられます。」と書いてありました。

坂道で子供たちの歩調ものろくなり、私もようやく最後尾に追いつきます。天心館女兒グループに入れ変っていました。指導員が励ましながら歩いていて、女の子達もまだ元気です。

11時ちょうど、ようやく宗麟原供養塔到着です。ここまで友愛園から10K。私は恥ずかしながら、初めてです。もちろん職員・子供たちも初めてでしょう。だっ広い川南台地の南側の林の中に、ひっそりとその古びた石の塔は立っていました。地域の有志がしっかり守っておられるのでしょう。荒れてはいません。備えつけの線香に火をつけ私も弔わせていただきました。

さあ、芝生の上で昼の弁当です。すでに先に到着したグループは食べており、私は靴を脱ぎそれをお尻に敷いて、お茶で喉（のど）をうるおした後おいしくいただきました。

ここを歩いてたずねたことが、子供たちの記憶にどう残っていくのか興味あり

ますが、戦争否定の感性を育ててくれたらと思います。子供たちは食べ終わった順に次々にスタート。めざすは、最後の目的地、石井記念川南保育園です。ここからは小学1、2、3年生も加わり、あと10Kを歩きます。大友軍のつもりで逃げるように歩くのか、島津軍になり追いかけるのか。心はそれぞれです。川南保育園ではおいしいおしるこを調理師が作って待っています。私も気合いを入れなおして歩き始めました。

尾鈴山がどっしりと大地に横たわっているのを左にながめながら、ジャガイモの植付けの準備の始まった広い畑の中の道をひたすら歩き、1時40分によりやく到着です。すでに中・高生たちは山本小学校の運動場でサッカーに興じていました。

この友愛通信は、それから1週間ほどして書き始めていますが、このハイキングを通して、新たな使命が課せられたような気がしています。導きなのでしょう。石井十次の理想郷の地盤に、400数十年前の若者たちの夢や思いが埋まっていることにも心を寄せ、またその大地を守っていることに気概と誇りを持ち、彼らを供養する場をも設けること一。